

# 藤原為隆邸の庭園

## － 平安京左京四条一坊二町の調査 －

<http://www.kyoto-arc.or.jp>

(公財) 京都市埋蔵文化財研究所・京都市考古資料館



第2期 池（北東から）

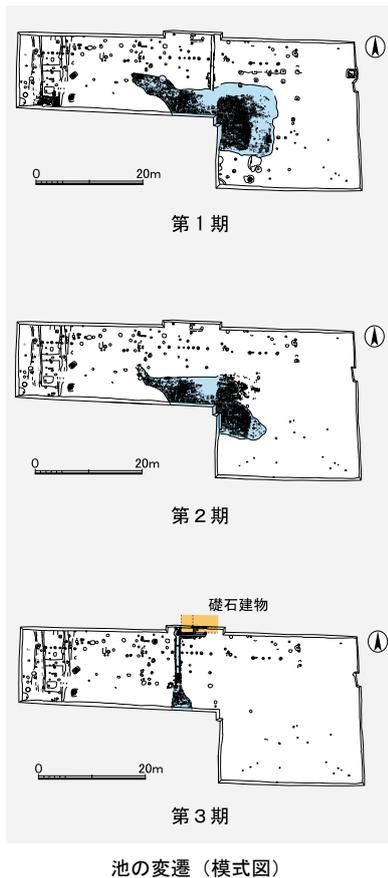
東岸に大きめの石が敷かれた岬が作られる。

平安京内では、庭園跡の発掘調査が比較的多く行なわれています。同じ都城でも、限られた調査しかない平城京とは対照的です。庭園跡が見つかるのは離宮や邸宅跡が一般的であり、平安時代中期・後期になると法成寺や六勝寺のように寺院と庭園がセットで作られる例が普遍化していきます。今回紹介するのは、平安京左京四条一坊二町跡の調査で見つかった平安時代後期（12世紀前半）の庭園です。

調査地は、中京区壬生朱雀町にある京都市立朱雀第一小学校の南隣です。ここは平安宮の朱雀門から南へ約700mに位置し、平安京の中心道路である朱雀大路に面した一等地にあたります。この庭園の調査では、池が約50年の間に2度作り作り替えられ、3期にわたる変遷が明らかになりました。

第1期の池は北西が突出した方形で、その規模は南北13m、北岸近くで東西26mに及び、池の深さ

は40cm前後です。北岸には径10cm程度の礫を貼った洲浜すはまが作られません。池の形状から北西部に導水施設があったと考えられますが、後の作り替えによってなくなっていたため、確認することができませんでした。池には水を引いていましたが、主な水源は池底からの湧水と思われる。池底には径10cm程度の礫が敷かれており、この礫敷きは池が作り替えられても使われ続けました。



池の変遷（模式図）

第2期の池は、第1期の池の北東岸を埋めて岬状の張り出しを作り、東岸が曲線的になり、M字を歪めた形に作られています。池の規模は南北11m、北岸近くで東西19mとなり、第1期の池より小さくなります。池の北岸には径10cm程度の礫を貼って洲浜が作られ、そこから東へ続く岬部分には径30

～40cmの石が敷かれるように置かれます。岬の意匠は、北岸の穏やかな洲浜とは異なる荒磯を表現したとみられます。岬の構築には当時の土木技術が駆使されており、杭を池底に打ち込み、細長い板を杭の前後に編むように通して岬の形をした土留めが作られます。土留めの内部に土を充填する際、積み重ねた土が崩れるのを防ぐため、土と土の間に樹皮を敷いています。これを岬の核として、その周囲に粘土を盛って完成させています。また、池の北西部には、瀬落しやりみずともなう遣水が作られます。瀬落しは、径40～80cmの大小の石で構成されており、それらは花崗岩とチャートが使用されます。

第3期の池は、第2期の池の東部をさらに埋め立て、西部も埋めたために池の形が大きく変化します。池の規模は東西4m、南北4mとさらに小さくなります。池の北岸には径10cmほどの礫を貼った洲浜が作られます。池の西部が埋められたため第2期の遣水はなくなり、池の北岸に接続する南北方向の石組溝が導水施設として新た

に設けられます。この石組溝を北へ延長したところには、礎石建物があります。

ところで、この調査地は平安時代後期の公卿である藤原為隆ふじわらのためたかが、30年ほど仏事を行なう場所として使用していたことが『永昌記』えいしょうき（藤原為隆の日記）の保安5年（1124）の記事から知られます。また、『中右記』ちゆうゆうき（藤原宗忠ふじわらのむねただの日記）などの文献史料には、藤原為隆が大治2年（1127）に丈六の阿弥陀、薬師、不動の三尊を安置した仏堂を建立し、その3年後にここで亡くなったことが記されています。さらに、藤原為隆が建立した仏堂には池がともなっていたことが読みとられ、浄土を意識した庭園が作られたと思われる。

その池が、今回検出した池であったと考えられます。今のところ、調査の3期にわたる池のうち、どの段階にあたるのかは特定できていません。しかし、藤原為隆による仏堂の建立が、池の作り替えの一因となっていたと考えてよいでしょう。

（丸山真史）



第2期 岬の構築状況（南西から）  
土留めのために杭・板・樹皮が用いられる。



第1期 池（北東から）  
池の内部に並ぶ杭は、第2期の岬を構築する時のもの。